

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：35505

研究種目：若手研究

研究期間：2022～2023

課題番号：22K13157

研究課題名(和文)日本語学習者の場所を表す格助詞「で」の習得 - 韓国語話者とベトナム語話者 -

研究課題名(英文)The acquisition of Japanese active particles de by Japanese learners-Korean speakers and Vietnamese speakers-

研究代表者

岡田 美穂 (Okada, Miho)

至誠館大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：30828075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：中級レベルの日本語学習者の格助詞「で」の習得過程を探った。中国人学習者に見られた移動先「に」との混同による「で」を「に」とする誤用(1)「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」、また(1)の「に」を「移動先」、(2)「*食堂にうどんを食べた」の「に」を「存在場所」とする使い分けが、韓国語学習者とベトナム語学習者にも見られるかを調査した。その結果(1)と(2)の「に」は概ね使い分けられていたが、格助詞選択テストの分析結果では上記の混同による(1)は見られなかった。中級の中でも低い日本語レベルの者には(1)と存在場所「に」との間に混同が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では中級レベルの日本語学習者の格助詞「で」の習得における1つの段階で普遍的な部分と母語の影響を受ける部分とを示すことができた。動作動詞の現在形を伴う文で動作場所「で」を「に」とした誤用(「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」)は、中級レベルの中でも日本語レベルが低いときには存在場所「に」との混同、日本語レベルが高くなったときには移動先「に」との混同によって現れる可能性があるが、学習者の母語によっては現れないことを示したのである。教育の現場では学習者の「で」の習得の段階を知る1つの目安となり得る。

研究成果の概要(英文)：The present study explored the acquisition process of the Japanese case particle "de" by intermediate-level Japanese language learners. We investigated whether Korean and Vietnamese learners exhibited the errors observed among Chinese learners of Japanese: (1) misusing "ni" instead of "de" due to confusion with the destination marker "ni", as in "*Ano kissaten ni kofi wo nomu", and (2) errors in distinguishing between "ni" as a destination marker in (1) and as a location marker in "*Shokudou ni udon wo tabeta." Our findings showed that while learners generally distinguished between "ni" in (1) and (2), analysis of the case particle choice test did not reveal the aforementioned confusion-based error (1). Lower-intermediate level learners exhibited confusion between the use of "ni" as in (1) and its use as a location marker.

研究分野：日本語教育

キーワード：場所を表す格助詞「で」の習得 移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同 存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同 中級レベルの日本語学習者

1 . 研究開始当初の背景

日本語学習者の格助詞「で」の習得における発達段階はまだ解明されていない。日本語学習者は、日本語の学習が始まって早い段階で動作場所を表す格助詞「で」と存在場所を表す格助詞「に」を学習した後、それらを混同することが知られている。(2)「食堂にうどんを食べた」の誤用は、動作場所「で」と存在場所「に」との混同によるもので(久保田 1994)、日本語能力が初級レベルの母語の異なるさまざまな日本語学習者に現れる(高見沢・ハント・蔭山・池田・伊藤・宇佐美・西川 2008 等)。このことから、動作場所「で」の発達段階は、まず存在場所「に」との混同による誤用が現れる段階があると言える。次の段階はどのような段階があるか。次の段階を知るためには、中級レベルの日本語学習者を対象として動作場所を表す「で」の使用状況を調べなければならない。

岡田・林田(2016)は「中級レベルの中国語話者に現れる(1)「あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」はどのような「に」の用法との混同による誤用か」を課題とした研究を行い、現象的には同じものに見える(1)と(2)の誤用の質的な違いを明らかにすることで、格助詞習得の発達の1段階を探った。(2)は「食べた」が「タ形(過去形)」であり、「食堂」に学習者が存在しうどんを食べたことが表されているのに対し、(1)は「飲む」が「ル形(現在形)」であり、「あの喫茶店」に学習者がまだ存在しておらず、これから移動することが含意されている点に違いがある。データを分析した結果、(1)の「で」→「に」の誤用が移動先「に」との混同によるものであり、存在場所「に」とは関係がなかったことを示した。また、中国語話者が「で」→「に」の誤用を、(2)の文では「存在場所」、(1)の文では「移動場所」として明確に使い分けしていることも分かった。だが、上記のような使い分けが見られるのは中国語話者に特有のものなのか、それとも、多くの日本語学習者が辿る「で」の習得における発達の1段階であるのかは不明である。

2 . 研究の目的

本研究は、日本語を第2言語として学習する、日本語学習者の格助詞「で」の習得における発達段階の1つを解明することを目的として以下の課題を設定した。[1] 中級レベルの韓国語話者とベトナム語話者には、(1)の動作場所「で」→「に」の誤用が現れるか。現れたならば、その誤用は移動先「に」との混同によるものであるか。[2] 中級レベルの韓国語話者とベトナム語話者には、動作場所「で」→「に」を(1)では「移動場所」、(2)では「存在場所」という明確な使い分けが見られるか。[2-1] 上記の使い分けが見られたならば、韓国語、ベトナム語という学習者のそれぞれの母語によって影響を受ける部分が見られるか。

3 . 研究の方法

課題[1]を明らかにするためには、岡田・林田(2016)で作成した2枚の調査票を改良した調査票1枚を作成した。問題文は(A)動作場所「で」を正答とし、先述した(1)のように動詞が「ル形」であり、「場所」に主体がまだ存在しておらずこれから移動することが含意されている文、(B)移動先「に」を正答とする文、(C)存在場所「に」を正答とする文、そして、(D)は「を」を、(E)は「から」を正答とするダミー文から成る。(A)の問題文において学習者が「に」を選んだ誤答率を目的変数とし、説明変数には(B)の移動先「に」の正答率および(C)の存在場所「に」の正答率を用いて統計ソフトのSPSSで重回帰分析をした。岡田・林田(2016)で見られた中国語話者の結果と同様に移動先「に」の正答率にかかる係数の符号が負であり有意となり、存在場所「に」の正答率にかかる係数が有意とならなければ、動作場所「で」を「に」と混同する原因が、移動先「に」との混同であることの直接的な証拠になるからである。課題[2]を明らかにするためには、岡田(2016)、岡田・李(2021)で作成した調査票を基に問題文を作成した。得られた回答から「で」の箇所「に」を用いる学習者の意図を知ることができる。「その他」を選択した者の中から3人に対しインタビューも行った。ベトナム語話者に対しては岡田(2016)の中国語話者と同様に翻訳調査を行った。

4 . 研究成果

韓国語話者(JFL, JSL)に対する調査の結果、ベトナム語話者(JFL)(岡田・林田 2024a)と同様の結果が得られた。すなわち、回帰分析では(1)の動作場所「で」→「に」は存在場所「に」との間には何ら関係が見られなかったものの、移動先「に」との間にも関係が見られず、JFLのN3・N4レベルの者には(1)の「で」→「に」と存在場所「に」との間に有意な負の関係が見られた。存在場所「に」を用いることで(1)の誤用が減ることを意味する。(1)は「移動先」、(2)は「存在場所」と概ね使い分けられていた。

本研究の成果から次のような動作場所「で」の習得過程が推測される(岡田・林田 2024b)。日本語学習者は「に」を初級レベル時に「主体の存在」場所として用い、中級レベルにおけるN4・N3レベル時には「離れた場所の主体の存在」場所にも用いるようになっていくと考えられる。その頃「で」の習得では(1)を「移動先」、(2)を「存在場所」と概ね使い分けようになっているため、場所への移動が前提となる(1)の「で」と存在場所「に」との間で混乱が生じる。その後日本語能力が向上したN2レベルでは(1)の「で」が、中国語話者には移動先「に」と混同されるが、韓国語話者、ベトナム語話者には混同されない。但し、ベトナム語話者は助詞の正答率が低かった

め正答率が上がれば混同される可能性も否定できない。(1)の動詞は難易度が低いため、難易度の高い動作動詞を伴う「で」と移動先「に」との間の混同の有無については今後の課題となる。

引用文献

- 岡田美穂・李相穆(2021)「韓国語を母語とする中級レベルの日本語学習者の動作場所を表す『で』の習得 - 形式と意味に焦点を当てて - 」『東アジア日本語・日本文化研究』29, 37-53, 東アジア日本語・日本文化研究会.
- 岡田美穂・林田実(2016)「中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者の移動先を表す『に』と動作場所を表す『で』の習得」『日本語教育』163, 48-63, 日本語教育学会.
- 岡田美穂・林田実(2024a)「中級レベルの日本語学習者の場所を表す格助詞「に」の習得 - ベトナム語話者を対象として - 」『東アジア言語文化論叢』3, 41-57, 東アジア言語文化研究会.
- 岡田美穂・林田実(2024b)「韓国語を母語とする中級レベルの日本語学習者の場所を表す格助詞『で』と『に』の習得」第3回東アジア言語文化研究会.
- 久保田美子(1994)「第2言語としての日本語の縦断的習得研究 - 格助詞『を』『に』『で』『へ』の習得過程について - 」『日本語教育』82, 72-85, 日本語教育学会.
- 高見沢孟・ハント蔭山裕子・池田悠子・伊藤博文・宇佐美まゆみ・西川寿美(2008)『新・はじめての日本語教育1 日本語教育の基礎知識』アスク.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡田美穂・林田実	4. 巻 3
2. 論文標題 中級レベルの日本語学習者の場所を表す 格助詞「に」の習得 ベトナム語話者を対象として	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東アジア言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡田美穂・林田実
2. 発表標題 中級レベルの日本語学習者の場所を表す 格助詞「に」の習得 ベトナム語話者を対象として
3. 学会等名 第2回東アジア言語文化研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岡田美穂
2. 発表標題 韓国語を母語とする中級レベルの日本語学習者の場所を表す格助詞「で」と「に」の習得
3. 学会等名 第3回東アジア言語文化研究会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------